

# 赤とんぼ

新美南吉

青空文庫



赤とんぼは、三回ほど空をまわつて、いつも休む一本の垣根かきねの竹の上に、チヨイととまりました。

山里の昼は静かです。

そして、初夏の山里は、真実ほんとうに縁につつまれています。

赤とんぼは、クルリと眼玉めだまを転てんじました。

赤とんぼの休んでいる竹には、朝顔あさがおのつるがまきついています。昨年さくねんの夏、この別荘べっそうの主人が植うえていった朝顔の結んだ実が、また生はえたんだらう——と赤とんぼは思いました。

今はこの家には誰もだれいないので、雨戸あまどが淋さびしくしまっています。

赤とんぼは、ツイと竹の先からからだを離はなして、高い空に舞まい上がりました。

三四人の人が、こつちへやつて来ます。

赤とんぼは、さっきの竹にまたとまって、じつと近づいて来る人々を見ていました。

一番最初にかけて来たのは、赤いリボンの帽子ぼうしをかぶったかあいとおじょうちゃんです。

た。それから、おじょうちゃんのお母さん、荷物にものつをドツサリ持った書生しよせいさん——と、こ  
う三人です。

赤とんぼは、かあいとおじょうちゃんの赤いリボンにとまってみたくなりました。  
でも、おじょうちゃんが怒おこるとこわいな——と、赤とんぼは頭をかたげました。

けど、とうとう、おじょうちゃんが前へ来たとき、赤とんぼは、おじょうちゃんの赤い  
リボンに飛びうつりました。

「あッ、おじょうさん、帽子ぼうしに赤とんぼがとまりましたよ。」と、書生さんがさげびまし  
た。

赤とんぼは、今におじょうちゃんの手が、自分をつかまえに来やしないかと思って、す  
ぐ飛ぶ用意をしました。

しかし、おじょうちゃんは、赤とんぼをつかまえようとせず、

「まア、あたしの帽子ぼうしに！ うれしいわ！」といって、うれしさに跳とび上がりました。  
つばくらが、風のようにかけて行きます。

かあいとおじょうちゃんは、今まで空家あきやだったその家に住みこみました。もちろん、お

母さんや書生しよせいさんもいっしょです。

赤とんぼは、今日も空をまわっています。

夕陽ゆうひが、その羽はねをいつそう赤くしています。

「とんぼとんぼ

赤とんぼ

すすきの中は

あぶないよ」

あどけない声で、こんな歌をうたっているのが、聞こえて来ました。

赤とんぼは、あのおじょうちゃんだろうと思つて、そのまま、声のする方へ飛んで行き  
ました。

思った通り、うたつてるのは、あのおじょうちゃんでした。

おじょうちゃんは、庭ぎやうざいで行水すいをしながら、一人うたつたのです。

赤とんぼが、頭の上へ来ると、おじょうちゃんは、持ってたおもちゃの金魚をにぎつた  
まま、

「あたしの赤とんぼ！」とさげんで、両手を高くさし上げました。

赤とんぼは、とても愉快ゆかいです。

書生しよせいさんが、シャボンを持ってやって来ました。

「おじようさん、背中せなかを洗いましょうか？」

「いや——」

「だって——」

「いや！ いや！ お母さんでなくつちや——」

「困こまったおじようさん。」

書生しよせいさんは、頭をかきながら歩き出しましたが、朝顔の葉にとまって、ふたりの話を

きいてる赤とんぼを見つけると、右手を大きくグルーツと一回まわしました。

妙みょうな事をするな——と思つて、赤とんぼはその指先を見ていました。

つづけて、グルグルと書生さんは右手をまわします。そして、だんだん、その円を小さ

くして赤とんぼに近づいて来ます。

赤とんぼは、大きな眼めをギョロギョロ動かして、書生さんの指先をみつめています。

だんだん、円は小さく近く、そして早くまわって来ます。

赤とんぼは、眼めまいをしてしまいました。

つぎの瞬間、赤とんぼは、書生さんの大きな指にはさまれていました。

「おじようさん、赤とんぼをつかまえましたよ。あげましょうか？」

「ぼか！ あたしの赤とんぼをつかまえたりなんかして——山田のぼか！」

おじようちゃんは、口をとがらして、湯を書生さんにぶっかけました。

書生さんは、赤とんぼをはなして逃げて行きました。

赤とんぼは、ホツとして空へ飛び上がりました。良いおじようちゃんだな、と思いながら——

空は真青に晴れています。どこまでも澄んでいます。

赤とんぼは、窓に羽を休めて、書生さんのお話に耳をかたむけています、かあいとおじようちゃんと同じように。

「それからね、そのとんぼは、怒って大蜘蛛のやつにくいかかりました。くいつかれた大蜘蛛は、痛い！ 痛い！ 助けてくれってね、大声にさけんだのですよ。すると、出て来たわ、出て来たわ、小さな蜘蛛が、雲のように出て来ました。けれども、とんぼは、もともと強いんですから、片端から蜘蛛にくいついて、とうとう一匹残らず殺してしまいま

した。ホツとしてそのとんぼが、自分の姿を見ると、これはまあどうでしょう、蜘蛛の血が、まっかについてるじやありませんか。さあ大変だつて、とんぼは、泉へ飛んで行って、からだを洗いました。が、赤い血はちつともとれません。で、神様にお願ひしてみると、お前は、罪の無い蜘蛛をたくさん殺したから、そのたたりでそんなになつたんだと、叱られてしまいました。そのとんぼが今の赤とんぼなんです。だから、赤とんぼは良くないとんぼです。」

書生さんのお話は終わりました。

私は、そんな酷い事をしたおぼえはないがと、赤とんぼが、首をひねって考えましたとき、おじようちやんが大声でさげびました。

「嘘だ嘘だ！ 山田のお話は、みんな嘘だよ。あんなかあいらしい赤とんぼが、そんな酷い事をするなんて、蜘蛛の赤血だなんて——みんな嘘だよ。」

赤とんぼは、真実にうれしく思いました。

例の書生さんは、顔をあかくして行つてしまいました。

窓から離れて、赤とんぼは、おじようちやんの肩につかまりました。

「まア！ あたしの赤とんぼ！ かあいい赤とんぼ！」



おじようちやんの瞳は、黒く澄んでいました。

暑かった夏は、いつの間にかすぎさつてしまいました。

朝顔は、垣根にまきついたまま、しおれました。

鈴虫が、涼しい声でなくなりました。

今日も、赤とんぼは、おじようちやんに会いにやって来ました。

赤とんぼは、ちよつとびつくりしました。それは、いつも開いている窓が、皆しまつて  
いるからです。

どうしたのかしら？ と、赤とんぼが考えたとき、玄関から誰か跳び出して来ました。  
おじようちやんです。あのかあいおじようちやんです。

けれども、今日のおじようちやんは、悲しい顔つきでした。そして、この別荘へはじ  
めて来たときかぶつた、赤いリボンの帽子を着け、きれいな服を着ていました。

赤とんぼはいつものように飛んで行って、おじようちやんの肩にとまりました。

「あたしの赤とんぼ……かあいい赤とんぼ……あたし、東京へ帰るのよ、もうお別れよ。」  
おじようちやんは、小さい細い声で泣くように言いました。

赤とんぼは悲しくなりました。自分もおじようちやんといっしょに東京へ行きたいなど

思いました。

そのとき、おじょうちゃんのお母さんと、赤とんぼにいたずらをした書生しよせいさんが、出てまいりました。

「ではまいりましょう。」

皆みな、歩き出しました。

赤とんぼは、やがておじょうちゃんの肩かたを離はなれて、垣根かきねの竹の先にうつりました。

「あたしの赤とんぼよ、さようなら——」

かあいとおじょうちゃんは、なんべんもふりかえっていいました。

けど、とうとう、皆みなの姿すがたは見えなくなってしまうたのです。

もう、これからは、この家は空家あきやになるのかな——赤とんぼは、しずかに首をかたむけました。

淋さびしい秋の夕方など、赤とんぼは、尾花おほなの穂先ほさきにとまって、あのかあいとおじょうちゃんを思い出しています。





# 青空文庫情報

底本：「ごんぎつね 新美南吉童話作品集」てのり文庫、大日本図書

1988（昭和63）年7月8日第1刷発行

親本：「校定 新美南吉全集」大日本図書

入力：もりみつじゅんじ

校正：鈴木厚司

2003年5月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 赤とんぼ

新美南吉

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>